

花時針

花時計

昭和五十四年四月十五日 発行

花時計

著者 五島美代子

〒100 東京都杉並区
堀ノ内一ノ二七ノ五

著作権継承者 五島茂

発行者 鎌田敬止

印刷者 塚田重

発行所 白玉書房

東京都千代田区神田神保町
二ノ二〇曉ビル下一〇一
電話東京二六四局四三八一

定価 四〇〇〇円

目次

I 暗い芽

雨	五
母と実家 さと	六
生れた家	九
暗い芽	一四
神さま	一六
涙	一八
姉ちゃん	二〇
火	二三
夜	二七
死顔	二八
蛇の卵	三〇
自転車	三一
隠居所	三三

Ⅱ 暗い芽以後

子どもの世界……………	三四
女中部屋……………	三五
フレッド……………	三八
クリスマス……………	四〇
道場……………	四二
水晶の橋……………	四三
新しい家……………	四六
おけいこ……………	四九
梯子段……………	五二
合言葉……………	五四
わたくしの本郷……………	六一
明治女学校の記憶……………	六五
わが読書遍歴……………	六七
小さい指導者……………	七三
イギリスの家族制度……………	八〇
子を喪ふ……………	八七
二年たつて……………	八九

Ⅲ 花 時 計

ひとみのこと……………	九〇
朝つゆに翅しめる蝶……………	一〇九
わたしの城 初孫を待つてゐる家……………	一一五
ヨーロッパの味……………	一二五
海の向うの明治——ハワイ生活——……………	一二八
ロンドンの冬の日……………	一二三
古典をたのしむ (1)……………	一二七
古典をたのしむ (2)……………	一三一
花時計 (1)……………	一三四
花時計 (2) 早春……………	一三六
花時計 (3) 青い鳥と定家の歌二首……………	一四一
花時計 (4) 師弟ということ……………	一四五
花時計 (5) 「シカゴ詩集」……………	一四九
花時計 (6) 国際ペン大会……………	一五三
花時計 (7) 台風のあとの名月……………	一五七
花時計 (8) 軽井沢山荘……………	一五九
花時計 (9) 初夢……………	一六三

花時計 ⑩	二月二十三日	一六四
花時計 ⑪	引越	一六六
わかる俳句	わからない俳句	一六七

Ⅳ 古歌新見

(1)		一七五
(2)		一七五
(3)	三山の歌	一九四
	万葉三歌人 磐之媛・額田王・坂上郎女	一九七
	みかさの山に	二〇三
	古今和歌集寸感	二二二
	和泉式部の歌	二二六
	和泉式部の秀歌	二二八
	和泉式部の秀歌	三三一

Ⅴ 短歌随感

近代短歌と古典	—— 初版「みだれ髪」をよむ	二二九
利玄への畏れ	—— 近代歌人からの継承	二三四
私たちの問題	—— 一九四六年	二四〇
歌のはじめ (上・下)		二四三

Ⅵ 源氏物語研究

私の言葉——放送メモより——	二四八
桜花耽溺	二五一
わが歌の秘密	二五四
生涯の仕事と念じて——朝日歌壇二十年——	二五七
この一年	二五九
朝日歌壇と二十二年	二六一

二六三

Ⅶ 妃のきみ

一冊の本 源氏物語	二六五
源氏物語宇治十帖私見——橋姫巻の解釈について——	二六七
源氏物語宇治十帖に描かれた愛と死について	二八五
源氏物語と月	二九六
紫式部の歌	三〇〇
源氏物語「日本文化研究国際会議」(一九七二年)報告	三〇五
美智子さまの「母の歌」	三二七
あとがき	三三一
五 島 茂	三三一

花
時
計

五島美代子エッセイ集

I
暗
い
芽
——
自叙伝の一部
——

雨

父の書齋の窓は一やうに曇つてゐた。外にはびしょ／＼細い雨こまかが降つてゐる。美代子はやつと背のとゞく様になつた窓ガラスに顔を押しつけて、一人で庭を見てゐた、——花壇のまはりの草が寒さうにふるへてゐる。——

この時美代子の心は初めて、はつきり何かに目さめたやうであつた。あまりにあざやかに、目の前の景色が心に刻みこまれたため、彼女はもう世界中がいつも雨降のやうな気がした。何も彼もが、かうした景色の中でなされた事と思へた。美代子は自分の心に近いいつもの話を思ひ出すと、急に悲しくなつて来た。

「おぢいさんは山に柴かりに、こんなところをいつたんだわ」

何ともいへないわびしいそゞろ寒さが胸をおしつける、窓の内はうす暗く、外には青白い雨あしが、冷たく光りつゞけてゐる。

大人の世界は、扉ドヤ一重の向うにいそがしかつた。

母の実家さと

若い叔父がねころんでゐる傍に、小さい叔母と二人で遊んでゐた美代子は、ふいと障子のガラス越しに、庭の藤棚の花を見た。

「あれとつて！」さういつて、大好な叔父にせがんでも、叔父は中々起上らうとしなかつた。

「よう、ぢいちゃん。藤の花とつてよう」

「今いやだ」と頭をかゝへてゐる。

「ぢや、あたしがとつて上げるわ。ね、美いちゃん」と、やさしい叔母が傍からいつても、

「うゝん、ぢいちゃんでなくつちやいや」

さういつて、美代子はどうしてもきかなかつた。好きな叔父でなければいやでもあつたし、又小さい叔母ではとどかないから駄目なやうな氣もしたのであつた。——美代子が四つの春である。たうとう手にとらずにしまつた藤の花房は長く日光にきらめいてゐた。

三畳の間の襖が半分あいてゐて、そこに、さかさになつて髪をといてゐる祖母の姿をちらと見た。髪は黒々として長かつた。美代子が祖母の長い髪を見た、最初の最後であつた。

美代子の生まれようとする年に亡くなつた夫の棺に入れるため、祖母はその髪に鉢をあてようとしたが、その時まで六つの末娘——美代子の小さい叔母——が泣いて手にすがるので、たうとう止めてしまつた。その髪を、その小さい叔母さへ死んでしまつた年に、祖母はやうやく切つたのであつた。

急に年寄らしくなつて、火ばしの上に手をつき乍ら長火鉢の前に坐つてゐる祖母の後にまはつては、

「おばあちゃん、髪、長くなあれ」と、美代子は切下げの先を引ばつた。

「雨がふつて、雷でもなれば来ないが」と、約束した母が迎へに来る筈の日であつた。

「かみなりなれ、雨ふれ」

美代子は朝からさういつてゐた。誰よりも美代子びいきであつた叔父とやさしい小さい叔母とが相ついで死んでしまつても、大きい姉ちゃんと呼んでゐる若い叔母とまだ五十になつたばかりの祖母との家は、美代子を十分に引つけた。

山王様のお祭り、

門の前に祖母に手を引かれて立つてゐる美代子の目の前を、美しいものが夢のやうにいくつか通りすぎた。中の一つの山車の上には、近所の小さい子供が扮した殿様とお姫様と、眉を落した奥方とが乗つてゐた。立つてゐる殿様の横顔には、秀でた眉がはつきり句つてゐた。お姫様の美しさは美代子をすつかり興奮させてしまつた。三人が一日代りに役をまはして持つのだといふ事を祖母に説明されて、美代子は更にびつくりした。殿様はいつまでも殿様だとおもつたのに、「ちやおばあちゃん、今日とのさまだつた人がこんどはおくがたになるの？　そして眉毛をなくしてしまつたら、またおひめさまになるときどうするの」

美代子は不十分な詞でくりかへしく祖母に尋ねながら、そのことが心配で／＼ならなかつ

た。

「みいも日記つけるの」

美代子は祖母に買ってもらった帳面と赤い色鉛筆とをもちだして、めちや／＼の線をいくつもひいた。

「けふいく日？ おばあちゃん」

ときいては、

「――月――日」

さういひ乍ら、ぐぢや／＼を書いた。

「これ絵？ 字？」

本を見ると、いつもさうきいた。絵と思つたのが字であつたり、字を見て絵と思つたりした。

机の前に坐つてゐる若い叔母に体をおしつける様にして坐り乍ら、そのペンを借りて美代子は何か書かうとした。美代子が力を入れて線を引かうとすると、ペンの先は二つに分れてしまつて紙の上にはどうしてもインキのあとがつかかなかつた。

「このペンかけないわ」

さういつて又別のを貸して貰つても、矢張おんなしであつた。

「どうして大きい姉ちゃんのペンは先がわれてるの」

美代子は不平さうにいつて笑はれた。

生れた家

狭い庭の真中に、地にはふ様にして曲つてのびた百日紅がある。小さい叔母がまだ生きてゐる頃は、よくその姉の婚家に泊りに来た。その間中美代子は祖母の家でのみ許される腕白を、この五つしか年の違はない叔母一人に向けて發揮するのであつた。やさしい叔母は何をしても怒らないでたゞ／＼姪をかはいがつた。何かの拍子に美代子が衣紋竹を持つて打つまねをすると、叔母はこはがつて逃げる。美代子は面白がつて追かける。叔母はたうとう下駄をはいて庭まで逃げ出した。美代子も下駄をはくと、叔母は今度は歩くやうにしても登れる百日紅の幹にかけ上つて、二枝にわかれた所に腰かけてしまつた。そこから上は直立してゐて登れない。併し美代子には其処まですら上れなかつた。口惜しまぎれに、根元にぬぎすてた下駄をとつて、遠くにもつてゆかうとすると、叔母ははじめて大きな悲鳴を上げた。

「あら、大姉^{おはな}さあん、みいちやんが！」

叔母達の大姉さんと呼んでゐる美代子の母は、祖母にはじめての子であつた。「大姉さん」と叔母が呼んだ時、卒然として、家に在る時の美代子が呼びさまされた。母の膝許の美代子は、おとなしい、きゝわけのいゝ子、赤ちやんのいゝ姉ちやんである美代子であつた。

美代子はだまつて、手にした下駄を、百日紅の根元に並べた。

祖母と母と二人で話してゐた。

「美代子のはあれは本当はよわいんだね、つよがりなんだね」